



ひめゆり平和記念資料館

# 資料館だより



第48号  
2011.11.30

## 目次

- 資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1  
台湾 平和交流・視察の旅／「ひめゆりの乙女たち展」  
関連資料が寄贈される／『絵本 ひめゆり』刊行／元  
ひめゆり学徒による夏休み戦争体験講話 開催／第1  
回平和研究会 開催／学校教育との連携をはかるため  
の教員との意見交換会 開催／当館にて沖縄県博物館  
協会秋の研修会 開催／第4回ひめゆりガイド講習会  
開催／AED講習会行われる／2011年度学芸員実習  
行われる
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 本棚 (仲程昌徳)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 研究ノート⑤ ひめゆり学徒の証言の「ガス弾」  
とは何か・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 仲宗根政善日記抄(45)・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

# 資料館トピックス

## ◆台湾 平和交流・視察の旅

8月25日から28日まで、当館館長の島袋淑子と総務課長の諸見徳一が、台湾への平和交流・視察の旅に出かけました。これは国立台東生活美学館の林永発館長の招待によるもので、昨年につづき2回目となります。当館の他にも、沖縄県平和祈念資料館の呉屋禮子館長や立命館大学国際平和ミュージアムの高杉巴彦館長、韓国光州518基金会のキム理事長が招待を受け、4館合同の平和交流・視察の旅となりました。

2日目に、今回の旅のメインイベントである「国際交流座談会」が、緑島人権文化園區で開催されました。緑島は台湾の南東に位置する離島で、現在人口約3千人、年間約35万人の観光客で賑わっています。また二・二八白色テロにより不当に逮捕され収容された“政治犯”の監獄として利用されてきた、悲しい歴史を持つ島でもあります。

座談会には白色テロ受難者や園區関係者、人権キャンプ研修生、緑島住民などが多数参加し、招待された各館長からの館の紹介や取り組み等の報告に熱心に耳を傾けていました。

また一行は緑島人権文化園區や鄭南榕記念館、戦争と平和記念公園など、台湾の二・二八白色テロに関連する施設や平和博物館施設の視察を通して、それぞれの施設が精力的に体験者の証言を記録し、実物資料を整理保存し、それを基に「人権の大切さと平和への願い」を世界に広げていこうと取り組んでいることを知り、感銘を受けました。

招待して下さった国立台東生活美学館と今後も交流を続け、平和と人権への思いを共に広げていきたいと考えています。



報告をする島袋淑子館長（緑島人権文化園區）



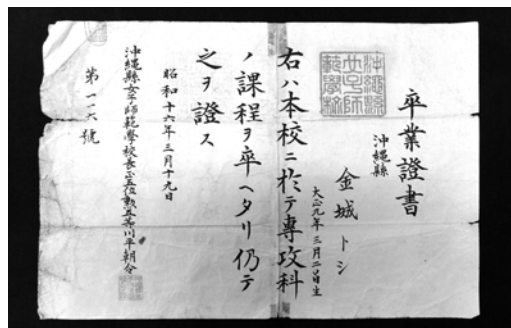
戦争と平和記念公園（高雄市）

## ◆「ひめゆりの乙女たち展」関連資料が寄贈される

1980年に全国の主要8都市と沖縄で開催され、大きな反響を呼んだ「ひめゆりの乙女たち展」関連資料が6月と7月に相次いで当館に寄贈されました。

東京大空襲・戦災資料センターによって寄贈された資料は、①朝日新聞社主催「ひめゆりの乙女たち展」展示資料（1980年）、②朝日新聞企画部編『母と子でみるひめゆりの乙女たち』（草土文化、1983年）、③未刊『戦後を生きたひめゆりの乙女たち（仮題）』に関するもので、元ひめゆり学徒への戦後についてのインタビューが録音されたテープやその原稿などの未公開資料も含まれています。同資料は、展覧会の担当者であった立石亥三美氏や土岐島雄氏により自宅や職場に整理・保管されていましたが、土岐氏の東京大空襲・戦災資料センター副館長就任により、収蔵庫に長く保管されていたものです。

また、卒業証書などの師範学校女子部関係資料が、ひめゆり同窓生の伊良波トシ（旧姓金城）さんの長女



寄贈された「師範一部の卒業証書」

である山本和代氏によって寄贈されました。中でも「師範一部の卒業証書」（1939年）、「小学校教員免許状」（1939年）、「専攻科の卒業証書」（1941年）は、沖縄戦による焼失をまぬがれ、『ひめゆりの乙女たち展』に展示された重要な資料です。大切に保存し、活用させていただきたいと思えます。

## ◆『絵本 ひめゆり』刊行

6月23日、当館は、ひめゆり学徒生存者の手による初めての絵本『絵本 ひめゆり』を刊行しました。当館では、開館以来、展示や体験者による展示室での説明を通して戦争体験を伝え続けてきました。しかし、小さな子どもたちに理解してもらうことが難しく、子どもたちにもひめゆり学徒の戦争体験を伝える方法はないかと模索するなかで絵本を制作することになりました。

絵本は、ひめゆりの楽しい学校生活の様子からはじまり、日を追って戦争が迫り、陸軍病院に動員され看護活動を行う様子、解散命令後に多くの友人たちを失い、米軍に収容されるまでが描かれています。

絵本の制作にあたって、絵を東京在住の絵本作家である三田圭介さんに担当していただきました。三田さんは、2008年に募集した「ひめゆりアニメプロジェクト」に応募してくださり、原画作家として選定させていただいた2名のうちのおひとりです。

ひめゆり学徒生存者と戦後生まれの三田さん、戦後世代の職員とが議論を重ね、完成まで2年近くの歳月を費やしました。絵にしていくなことや、子どもに伝える言葉を探すことを通じて、戦後世代には何が理解できているのか、どのようなことが体験者の経験と異なっているのか、など、今まで注目していなかったことや、誤解していたことが明らかになるなどして、制作作業そのものが、戦争体験を継承する試みとなりました。

完成直後に県内外の新聞、テレビに採り上げていただき、発売開始当日は、朝から絵本を求めの方が多く訪れ、また、県外からの電話での問い合わせも多くありました。子どもに伝えることができるツールを多くの方が望んでいたことがうかがえました。

この『絵本 ひめゆり』が、子どもたちと戦争について話し合う場をつくるものとなることを願ってやみません。



この ひめゆり学園で、わたしたちは いっしょけんめい ペンきょうを していました。うんどう会や ほっぴょう会、運動会 も ありました。



嵐になると ひこりきからも ぐんかんからも もったくさんの ほくだんが こんできました。

『絵本 ひめゆり』 2011年6月23日発行

文／ひめゆり平和祈念資料館 絵／三田圭介

発行／公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団

編集・デザイン／有限会社フォレスト 印刷・製本／株式会社近代美術

価格：1,500円

販売、問い合わせ先：ひめゆり平和祈念資料館 098-997-2100



## ◆元ひめゆり学徒による夏休み戦争体験講話 開催

8月23日から26日の4日間、当館多目的ホールで「元ひめゆり学徒による夏休み戦争体験講話」を実施しました。元ひめゆり学徒の戦争体験講話は、通常予約をいただいた団体にも行われています。しかし個人でも講話を聞きたいという要望が多く寄せられたため、家族連れの来館者が多い夏休みを利用して、一般向けの戦争体験講話を開催しました。

会場では小さいお子様を連れた若い親御さんなど、多くの家族連れの姿が見られ、また宮古島との夏休み交流事業で来県したという新潟の小学生たちなどが、熱心に耳を傾けていました。4日間で342名（1日平均57名）の方に元ひめゆり学徒の戦争体験講話を聞いていただく機会となりました。



会場の様子

## ◆第1回平和研究会 開催

10月3日、多目的ホールにおいて、仲程昌徳氏（元琉球大学教授、当財団評議員）をお招きし、「第1回平和研究会」が行われました。

当財団は、本年度より新規事業として平和研究所の設立準備をスタートさせましたが、平和研究会は、その活動の一環として、当館の証言員、職員が広く戦争と平和に関する認識を深め、平和研究所構想への提言を受ける目的で行うものです。

今回は、仲程氏に「仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を読む」というテーマで講義していただき、その後、質疑応答を行いました。

仲程氏からは、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』が書き起こされるのが「3月24日」であることをめぐって、仲宗根がなぜそのようにしたのかを具体的な記述を読み込むことで、仲宗根政善の心の中にあつたことに迫っていく読み方の提示や、「ひめゆり学徒隊」の呼称の起源と変遷をその背景に注目しながら追うことの重要性についての報告などがありました。質疑応答では、仲程氏から証言員に出された、そのような読み方についてどのように思うかといった問いかけに回答するかたちで、証言員からも活発に発言がありました。参加した証言員からは、日付や地名、用語など、ひとつひとつを細かく読み込むあり方を知り、このような作業が研究として必要だということを感じた、といった感想が出されました。



仲程昌徳氏



参加者

## ◆学校教育との連携をはかるための教員との意見交換会 開催

当館の証言員（元ひめゆり学徒生存者）は県内外の児童生徒を対象に戦争体験講話を行うことで、学校教育と連携して沖縄戦を伝える役割を果たしてきました。しかし将来、証言員の講話ができなくなったとき、学校教育と連携しどのように沖縄戦を伝えていくか、学校や教員とのつながりをつくっていくかが、当館の課題となっています。

一方で、学校現場では教員の多忙化により平和教育の取り組みが困難になっていると言われています。このような状況のもと、当館では学校教育との連携をはかるために、8月18日、中学・高校の教員10人にご出席いただき、意見交換の場を設けました。

意見交換会では、平和教育の現状や取り組みについて活発に意見が交換されました。平和月間の戦跡めぐりなど一過性の平和教育だけでなく、社会科や美術科（絵本の活用）、国語科（地域の戦争体験者から話を聞かせてもらい作文にまとめる）など、普段の授業の中で取り組んでいくことの大切さが指摘されました。そして学校や教員がいくら熱心に取り組んでも、生徒が受け身のままでは生徒の理解は深まらない、生徒が主体的になる切り口や方法を工夫し、生徒同士がお互いの多様な考え方を共有することが大切であることが認識されました。会の終了後、参加者からは「普段はこういう機会が少ないので、このような場を設けてもらえてとてもよかった」「他の人がどう工夫して取り組んでいるのか、いろんなアイデアを情報交換できるので、今後も開催してほしい」という感想が寄せられました。



意見交換会の様子

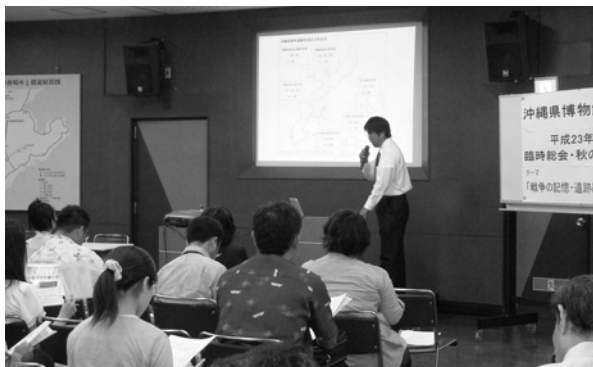
## ◆当館にて沖縄県博物館協会秋の研修会 開催

9月15日、16日の両日、沖縄県博物館協会の平成23年度秋の研修会が、当館を会場に行われました。沖縄県博物館協会は、沖縄県と奄美地域にある博物館が加盟する会で、年に2回研修会を開催し、成果報告や各地の巡見などを行っています。今回は、「戦争の記憶・遺跡とその保存」をテーマに研修会が行われました。

9月15日、多目的ホールにおいて行われた研修会では、はじめに、当館館長の島袋淑子が1時間ほどの戦争体験講話を行いました。続いて、当館学芸課長の普天間朝佳が「ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業」、南風原文化センターの土地克哉氏が「沖縄陸軍病院南風原壕群20号の整備と公開」、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭氏が「沖縄県内における戦争遺跡の実態について—詳細分布調査を通して—」というテーマで発表しました。各発表者との質疑応答では、何をどのように戦争遺跡と位置づけるのか、現在ボランティアの手によって進められている遺骨収集のあり方への意見とそれにどのように向き合うことが可能か、といった参加者からの質問がありました。

翌16日の午前中は、「ひめゆり学徒の戦跡めぐり」と題して巡見が行われ、伊原第三外科壕とひめゆりの塔の周辺、伊原第一外科壕、荒崎海岸を当館の学芸課職員で手分けして案内しました。伊原第一外科壕や荒崎海岸には初めて訪れるという方も多く、あらためて沖縄戦について知っていただく機会となりました。

参加された方からは、戦争体験を伝えていくことの重要性をあらためて認識した、自分たちの館でも沖縄戦に関わる企画をしていく必要性を考えさせられた、といった感想をいただきました。



1日目の研修会



2日目の「ひめゆり学徒の戦跡めぐり」(荒崎海岸)

## ◆第4回ひめゆりガイド講習会 開催

8月22日、当館多目的ホールにおいて、バスガイドやタクシー乗務員、平和ガイド、学生平和ガイドのみな様を対象に「第4回ひめゆりガイド講習会」を開催し、58人が参加しました。

今回は内容を2部構成とし、第1部では「ひめゆりの塔・資料館ガイドツアー」を、第2部では「証言員との質疑応答」を行いました。

第1部の「ひめゆりの塔・資料館ガイドツアー」では、職員が手分けして、ひめゆりの塔や第三外科壕、ひめゆりの塔周辺にある碑などを巡りながらガイドし、また資料館内では各展示室の特徴や展示されている実物資料のエピソードなどをまじえながらガイドツアーを行いました。

ガイド講習会では、毎回参加者から「元ひめゆり学徒の話が聞きたい」という要望が寄せられているため、第2部は、参加者から事前に寄せられた質問に証言員(元ひめゆり学徒生存者)がお答えする時間にしました。

参加者からは、「戦後、戦争体験を語るきっかけとなったものは何だったのか」や「具体的な皇民化教育の内容は」などの質問が寄せられ、証言員たちは自身の体験を交え、丁寧に答えていました。

会終了後、参加者からは「次回も参加したい」「戦争を伝えることは難しいけど、証言員の話聞いてあらためて伝えていきたい!と思った」という声が寄せられました。

また、職員によるガイドツアーの試みなど、今回の講習会は、今後の伝え方の可能性をさぐる貴重な機会となりました。



資料館ガイドツアー



証言員との質疑応答



## ◆ AED 講習会行われる

9月12日、当館職員が参加してAED設置にともない講習会が行われました。AEDとは発作などによって停止状態にある心臓を正常に戻す働きをする小型機器のことで、その機器の処置と同時進行で心臓マッサージを行う必要があります。機器の操作は音声ガイドによって進められるとはいうものの、いざというときには気が動転するため、普段からの訓練が必要になります。今回の講習会では、職員一人一人がAEDの操作と心臓マッサージを実習し、有意義な訓練となりました。



救命方法を聞く職員

## ◆ 2011年度学芸員実習行われる

9月12日から25日まで当館で、琉球大学の上里幸さん、東京学芸大学の榎本和代さん、川村学園女子大学の吉江史扇さんの3人が、学芸員資格取得のための博物館実習を行いました。

実習期間中、3人は実物資料の整理作業や、感想文の読み込み、ワークシートや『絵本ひめゆり』をテーマにした企画案の作成など、さまざまな実務を体験しました。さらに、ひめゆり学徒隊に関する戦跡めぐりなどのフィールドワークも行いました。

小学生、あるいは高校生の頃、当館を初めて訪れたときの印象が強く残っているという3人は、全ての課題に真剣に主体的に取り組んでいました。



実習生3名と当館証言員たち

以下の実習レポートでは、実習を通して学んだこと、当館に提案したいことを書いてくれています。

### ●実習生レポート①

#### これからの平和学習について（抄録）

琉球大学4年 上里 幸

ひめゆり平和祈念資料館にて2週間の実習を終えて、特に考えたのは、これからの平和学習についてでした。戦後66年経ち、「戦争を知らない世代」が家庭を持ち、教壇に立ち、博物館や資料館の学芸員を務める時代になりました。戦後間もない時代であれば、まだ戦争体験者も多くが健在で、そこそ家族や親せきといった近い人から直接体験を聞くこともできたと思います。しかし、私達の世代はそうではありません。実際、私は、戦争について興味を持つ前に、祖父母が他界しており、戦争体験を直接親族から聞いた経験がほとんどなく、祖父母から直接話を聞いた父母から間接的に聞くことしかできませんでした。更に同世代は、ほとんどが戦争に興味が無いという事実を高校生の時に目の当たりにしました。戦争体験者が実際に来て話してくれる平和講演会の場において、ほとんどの人が聞いておらず、その場に臨む態度としても、「面倒くさい」や「時間の無駄」と言ったものばかりでした。とても悔しく涙した覚えがあります。そういう私達の世代が教師として、親として、戦争を語り継いでいく立場になることが、私には正直一番の不安でした。「戦争を知らない世代」であるどころか、

「戦争に無関心である世代」なのではないかとずっと疑問と不安を持ち続けていました。

しかし、この2週間の実習を終えて、一番感じたことは、「私達の世代もまだまだ捨てたものではない」ということでした。受付業務で触れることが出来たひめゆりの来館者が若い世代が多かったことや、修学旅行の学生たちが、興味関心の薄い人も多かったけれど、真面目に真剣に見て回っている人も多かったことが印象に残っています。少なくとも彼らは、ひめゆり平和祈念資料館で確実に何かを感じて帰っていったことだと思います。

(中略)

最後に、平和教育をするにあたって考えなければならないのは、継承する側である次世代にそれを受け入れるだけの力が大きく不足していること、それは子どもだけではなく、大人も含んだ戦争を知らない全ての世代に言えることで、どれだけ平和教育の大切さを訴えても、そのままの状態では彼らには何も響かない可能性が高いです。子どもだけの平和教育ではなく、大人も含めた平和教育を考えるべきであること、またその為には、「戦争」と大きな枠でくくるだけでなく、その背景、歴史、事実を伝えていくこと、何故こうなっていったのか、流れと原因、そして結果まできちんと伝えることがこれまでの平和教育や歴史教育に足りないものではないでしょうか。一部分だけ切り取って伝えることが、今の世代の「私達には関係ないし興味無い」という気持ちを生み出しているのだと考えます。現在でも沖縄には基地があり、そういった現代の問題とも関連付けて沖縄県民は勿論本土の人にも学んで欲しいです。だからこそ、教わる側の準備をきちんと整え、教える側の目的や意義等をしっかりと伝えること。学校教育だけでなく、社会教育としての平和学習も視野に入れてこれからどう発信していくか、今が一番大切な時期だと思います。

(後略)

## ●実習生レポート②

ひめゆり平和祈念資料館での実習を通して—戦争の記憶を継承する博物館の役割— (抄録)

東京学芸大学教育学部4年 榎本 和代

### ・実習を通して

実習を通して改めて考えさせられたことがある。1つ目は戦後世代が一層増えていく中で、沖縄戦に関する関心の薄れの深刻化である。沖縄戦＝南部での戦いという偏った認識しかされないこともしばしばで、マラリア、集団自決、日本軍の島民虐殺行為などは認識の範囲外になっている。本土の国民からすると、沖縄ははるか遠い場所で、沖縄戦はそのはるか遠い場所で起こった遠い過去の出来事としか捉えられかねないのが現状である。

そして、2つ目は平和学習のあり方である。1つ目の意識から、次世代に戦争記憶を継承するために資料館内における平和学習のあり方、学校現場での平和学習のあり方についての新たな工夫が必要であると感じた。修学旅行生は時間的制約や一気に大勢が見学するという場所的制約、事前平和学習の問題などから、比較的文字量の多い第1展示室を素通りしていくケースが多くみられた。そして、生徒と教師の関係性も学校における平和学習の一翼になっているように思う出来事もあった。戦後世代の教師が、生徒に何を伝えるために平和学習を行うのか。相互の意識が混じらないまま平和学習を終えないために、学校現場・資料館における平和学習のあり方を再考する必要がある。

### ・戦争の記憶を継承する

このテーマに関しては、戦争体験者のいない次世代へと移り変わろうとしているまさに今問われていることであり、課題でもある。

展示されている「モノ」資料や証言などの言葉の資料は来館者の読み取る行為をかいして、訴えかけたり伝えようとしたりする。その行為には66年の時間を迎えるために読み取る本人の想像力を要するので、資料が誰に対しても同じことを語るわけではないだろう。戦争に対しての記憶が遠のいていっている今、戦争を語り継いでいくためには博物館側の工夫がもちろん必要だが、来館者に対して



読み取るための時間と姿勢が必要なのではないか。そのため、来館者は博物館を訪れる際に身構えたり、展示を見終えた後はなんとも言えぬ体がずっしりと重くなる感覚を覚えたりすることがある。それだけ、戦争の記憶を継承していくということは繊細なものであると言え、両者の関係が重要である。

また「戦争」というと、「被害の記憶」のみが伝えられたり、「加害の記憶」に関して忘却されていってしまったりすることがある。なぜ、沖縄戦が起こったのか。沖縄戦でこれほどの犠牲者が出たのはなぜか。強制連行された朝鮮の人々に対する暴力行為についても忘却されたり、そもそもその事実を認めなかったり知らないという人もいる。これからは戦争体験者から直接お話を聴ける私たち世代が、戦争体験者から直接お話を聴くことが出来ない世代に対して戦争を伝えていかなければならない。そのために戦争の被害と加害の実態を知り、学び、考え、戦争を二度と起こしてはいけないという気持ちを持って伝えていかなければならない。

今もなお、世界には暴力が存在する。紛争、テロ、児童労働、飢餓、環境汚染、差別、虐待、いじめ。「戦争」を起こさせないようにするために「戦争」について知ると同じように、私たちは今ある暴力に対しても、知っていかなければならない。日本の問題はもちろんのこと、世界規模で「平和」を実現していかなければならない。

感想文部会で感想文を読んで、「戦争」のおそろしさ、「命の尊さ」について書いてあるものがほとんどであったが、そこから「原発問題」、「沖縄基地問題」、「日常にある平和ではない状態」にまで目を向けている人々も多くみられた。そういう人々を一人でも多く増やしていくことが戦争や平和を展示する博物館の役割であると考えている。

### ●実習生レポート③

#### ひめゆり平和祈念資料館に提案する平和学習のあり方について（抄録）

川村学園女子大学4年 吉江 史扇

ひめゆり平和祈念資料館で博物館実習を終えて、改めて平和学習について考えさせられた。実習中に来館者の様子調査・感想文整理作業等の来館者の反応に触れ合う機会があり、特に県外の修学旅行生の見学の様子を観察させてもらうことが多々あった。この修学旅行生の一部生徒が講話中にお喋りをする、携帯を見る、化粧を直す、寝る等のマナー違反や資料館見学では一分も経たないうちに出てきてしまう行動が目立った。やはり、沖縄県内の学校とは違い沖縄県外の学校での平和学習への取り組みはまだまだ足りないと感じた。県外の学校の平和学習の取り組みの中でもほとんどの学校が広島・長崎の原爆の話が台頭してしまい沖縄戦に関しては中学生では社会の授業、高校生では日本史の授業で少し習う程度でしか無い状態である。この授業で興味・関心を得てくれる子はいいが半数近くの子は沖縄戦を「昔の出来事」「現代とは関係ない」「自分の地域じゃないから関係ない」と戦争は自分と関係無いものと認識して、この事実を忘れていってしまう。戦争を体験した方々が少なくなっていく現在、どのようにして今の子供たちに平和学習を通して沖縄戦のことやひめゆり平和祈念資料館の理念である「教育の恐ろしさ・戦争の恐ろしさ・平和の大切さ」を伝えていけばいいのか。私はこの理念を伝えるべく次世代への平和学習のあり方を考えた。

まず、沖縄県外の修学旅行生を対象とした平和学習への提案である。この平和学習には事前学習の要素も入っている。県外の中高生は沖縄県内の中高生より沖縄戦に触れる機会が少ないため戦争に対する関心も薄いと思われる。そのため資料館を見学する際、事前学習無しではただ回って「かわいそうだな」程度ぐらいにしか感じず、平和についてもあまり考えないのではないだろうか。私が考える平和学習兼事前学習の提案は、資料館に見学に来る学校の中には事前学習を行う学校、行わない学校があるため、事前学習を行わない学校のためにも資料館側が資料館見学を意味があるものにしてもらうために沖縄戦やひめゆり学徒隊についての教材と映像資料を学校に提供し授業を行ってもらうことである。授業内容としては、主に映像資料を中心に行っていく。これは子供たちが興味のない話を聞くと「つまらない」「話が長い」と感じるだけであって、実際の映像を見てもらった方が話を聞くより

は子供たちもわかりやすく関心度も違う。教材は沖縄戦になるまでの経緯・沖縄戦を体験した人々の証言・ひめゆり学徒隊についてわかりやすくまとめたプリントを作り、映像資料と合わせて使う。

(中略)

この平和学習兼事前学習をやることにより、戦争の恐ろしさ、平和の有難さ、ひめゆり学徒隊について理解を深めてもらえたのではないだろうか。事前学習も兼ねているので修学旅行で資料館に来た時もただ回るだけでなく何かを得ていけると思う。

そこからひめゆり学徒隊の他にも沖縄戦関連の対馬丸や特攻隊について興味を持ってもらえるだけでなく、戦争に目を向け、平和をまた次の世代にも受け継がれていけるのではないのであろうか。

私は、ひめゆり平和祈念資料館の実習を終えて次世代に戦争の恐ろしさ・平和の有難さ・命の尊さを伝えていかなければいけないと強く感じ、そのためにどのような活動をしていったらいいのか、今以上に考えていく必要性を実感した。このレポートを通して実際に平和学習が行われたとした時にひめゆり学徒隊から平和について発信していけると思う。これからも次世代のための平和学習について考えていきたい。



## 相思樹

### 遺影とひめゆり学徒生存者

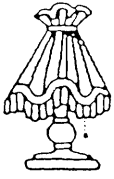
学芸員 古賀徳子

この頃は秋の修学旅行シーズンで、資料館にはたくさん生徒が来館する。大半の生徒が真剣に展示を見学し証言を読んでくれるが、中には昂揚した気分のまま大声で話しながら通り過ぎていく生徒もいる。また、第四展示室の学徒や教師の遺影を指さし、ふざける生徒もいる。そんなとき、ある証言員(ひめゆり学徒生存者)は、「この人たちは私のお友だちよ。あなたのお友だちの写真が笑いものにされたらどう思う?」と問いかけ、亡き友の人柄や最後の様子を話すといい。そうすると、どの生徒もまじめな表情になって聞いてくれるそうだ。

証言員たちは遺影についてどう思っているのだろうか。「遺影はこの人たちが生きていた証」、「壕に残した人の遺影の前では、その人の顔が浮かび、申し訳ない気持ちで心が痛む」、「亡くなった友だちに会いに行くような気持ち」、「資料館に通ううちに、遺影に向かって語りかけるようになった」(『開館20周年記念誌』から要約)。「(遺影の友だちと)一緒に伝えようね、という気持ちで話している」、「自分たちのことを忘れないで話しているねと、私たちを見てくれている」、「二度とこんなことにならないように、戦争で起こったことをみんなに伝えてよと言って、微笑んでいるような気がする」(聞き取りより)。

証言員にとって、遺影は単なる写真資料ではない。亡くなった友だちと先生がいつもそこに一緒にいて、証言員の活動を見守ってくれている。そういう存在なのだと思ふ。





# 本 棚

(元琉球大学教授 仲程昌徳)

## 北村 毅 『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』

沖縄戦は、兵士、非兵士をとわず無数の戦死者を出した。戦後、戦野に置き去りにされ、身元がわからず白骨化した無数の死体は、収容所から解放され、元集落に戻ってきた人々の手で集められ、適切な場所に埋葬された。人々はそこに塔を建て、戦死者を手厚く祀った。

北村毅『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』は、それらの慰霊の塔を核にして、戦死者たちをめぐる戦後の動向を考察したもので序章と五つの章からなっている。序章でまず全5章の概要を行い、第1章の「さまよえる遺骨—戦死者が「復帰」する場所」では、集落近辺で集められた遺骨が、納骨された場所から抜き取られていったことの問題、第2章の「「復帰」へといたる「病」—ひめゆりの塔と「沖縄病患者」」では、ひめゆりの塔を参拝した人たちの多くが「罹患」した「沖縄病」の問題、第3章の「「父」を亡くした後—遺児たちの戦跡巡礼と慰霊行進」では、軍人、軍属の遺児たちと日本遺族会との関係および本土側遺児と沖縄側遺児との「認識のずれ」をめぐる問題、第4章の「戦死者の魂が語り出すとき—戦後沖縄の心象風景」では、戦死者が憑依してユタになった者たちが、戦死者たちとどう関わってきたか、彼らはどう「霊魂」に対して向かいあってきたかといった問題、第5章の「風景の遺影—摩文仁の丘の戦後」では、摩文仁の丘が劇的に変貌していったことに関する問題を論じていた。

戦死者の収骨問題、「沖縄病」患者の問題、戦跡巡礼の問題、ユタの問題、摩文仁の変容といったような問題群は、これまでもいろいろなかたちで論じられて来たが、本書は、長いスパンで考え、多様な史、資料を駆使し、実に多くの知見に富んだ論を展開していた。

第1章では、野ざらしにされていた遺骨を自然洞窟へ納骨し、簡素な慰霊の塔を建立したことにはじまり戦没者中央納骨堂の建立そして国立沖縄戦没者墓園の建立といった新しい塔が建てられていくたびに行われた「転骨」で、どのような政治力学がそこに働いていたかを明らかにしていったこと、第2章では、ひめゆりの塔を介してなされたさ

まざまな動きを取りあげ、ひめゆりの塔の持つ多様な面を照らし出したこと、第3章では、本土の戦死者遺児たちと沖縄の遺児たちの確執を通して浮かびあがってきた問題に切り込んだこと、これは、たぶんこれまでこのような形で論じられることがなかったのではないかと思われるし、第4章では、戦死者の憑依によって「カミンチュ」、ユタになった人のとり行う「ヌジファ」を扱い、靖国神社で行われていることとの差違を論じたもので、これも新しい切り口であったと思われるし、第5章は、これまで多くの論者によって、いろいろに論じられてきたということでは決して新しい論題ではないが、「黎明の塔」から「平和の礎」の建立までの経緯とその問題点を手際よくまとめていた。

沖縄の戦争遺跡が、国家に簒奪されていく事態を悲憤の思いをこめて論じていく揺るぎない姿勢や、「血」「平和」をキーワードにした考察等、実に鮮やかなものであった。

戦争は、実に多くの問題を残していた。戦死者の問題はその一つである。沖縄の作家の多くが、「骨」と関わりのある作品を書いてきたのは、その現れで、戦争は戦闘状態にある時だけでなく、そのことによって生じたことまでも含むものであることを示していた。

本書は、戦争によって生じた戦死者を祀った塔を中心に扱っているが、それが、戦争と関わりのある研究であることは多言するまでもない。そしてそれは、戦争研究が、新たな地点に動き出していることをよく示すものとなっていた。

本書にならうかたちで戦争の残した問題に触れておけば、今なお除去のために避難を強いられる不発弾の問題がまずある。さらには、時たま新聞に報じられたりして話題になるもので、米兵によって戦利品として持ち去られた物品に関する問題もあるだろう。そのような問題に取り組んでいくことで、戦闘では見えなかった戦争が見えてくるだけでなく、戦後の沖縄をめぐる問題が浮かび上がってくることにもなるはずである。



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
**ひめゆり研究ノート⑤**  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

# ひめゆり学徒の証言の「ガス弾」とは何か

「突然パァーンパァーンと音がして、真っ白い煙がもくもくと立って、一寸先も見えなくなっちゃったんです。『ガスだー。ガスだー』と言う叫び声があっちでもこっちでも上がりました。」  
(宮良ルリ)

1945年6月19日朝、伊原第三外科壕(ひめゆりの塔の壕)が攻撃されたときの証言である。大量の白い煙(ガス)によって呼吸困難になり、壕の中の約100人中80人余が命を落とした。そこで、このできごとは「ガス弾」による攻撃と呼ばれてきた。この「ガス弾」とは一体何だったのだろうか。

### 1. 「ガス弾」は「黄燐弾」

伊原第三外科壕の「ガス弾」について、これまでは神経ガスやマスタードガスのような毒ガス、あるいは催涙ガスであったなど、様々な説があった。しかし、米軍は沖縄戦においてはそれらのガスを配備していないことがわかっている(『第10軍作戦計画アイスバーグ』)。そこで、ひめゆり平和祈念資料館ではこの「ガス弾」が「黄燐弾」であったと考えるようになった。

さらに、同じ壕にいたひめゆり学徒の「黄燐弾が撃ち込まれた(城間素子)」、「青い火が、黄燐弾みたいなのがパチパチ燃えていた」(大城信子)という証言もある。

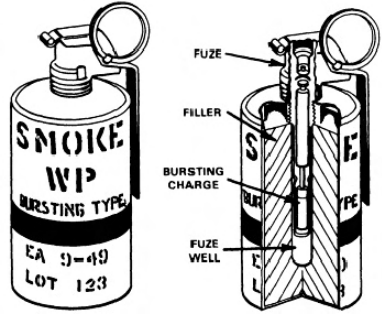
それでは「黄燐弾」とはどのようなものか。黄燐弾とは黄燐を充填した手榴弾、迫撃砲弾、榴弾砲弾などのこと。米軍は、攻撃目標を燃やす(焼夷)、白煙によって視界を遮る(煙幕)、敵を隠れている所から出させる(燻り出す)などの目的で使用した。黄燐は猛毒で、皮膚に付着すると火傷をおこし、空気に触れると自然発火する性質を持つ。暗所では青白く光る。なお、英語での表記はWhite phosphorusで、標準的な訳は黄燐であるが、白燐とも訳される。

伊原第三外科壕では『オーライ』と言う米兵の

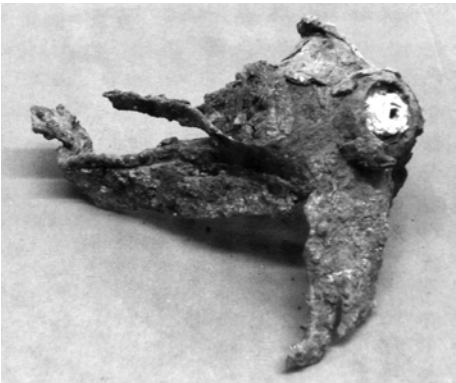
声と共にビール瓶のようなものが壕内に投げ込まれた(金城茂子元第三外科看護婦)という証言があることから、手榴弾タイプの黄燐弾(M15黄燐手榴弾)が使用されたことが判る。



那覇飛行場の南西に位置する丘の洞窟を燻り出す海兵隊。黄燐手榴弾が使われた。(沖縄県公文書館提供)



M15黄燐手榴弾の図解(米陸軍省『フィールドマニュアル No. 20-30』1988年)



M15黄燐手榴弾の破片(ひめゆり平和祈念資料館に展示)

## 2. 伊原第三外科壕以外の「ガス弾」攻撃

実は、沖縄陸軍病院第二外科、一日橋分室にも「ガス弾」攻撃のひめゆり学徒の証言がある。

### 沖縄陸軍病院第二外科

壕の入口にガス弾（砲弾）が落ち、壕の奥まで熱風が吹いてきた。防毒マスクをつけずに助けに行った看護婦数人が「頭がクラクラする」と異常を訴えた。看護婦の一人は苦しがつて服を脱ごうとするなどの意識障害に陥り、後に死亡。患者30～40人が死亡した。（島袋淑子、津波古ヒサ、嘉陽春子の証言を要約）<sup>\*1</sup>

### 沖縄陸軍病院一日橋分室

壕の入口にガス弾（砲弾）が落ち、物すごい爆風が襲った。ひめゆり学徒2人が爆風にたたきつけられて即死した。患者は4～5人が即死、多数の負傷者が出た。外傷はほとんどなかったにも関わらず、教師2人と学徒1人が重度の意識障害となりまもなく亡くなった。学徒2人はガス弾の後遺症で意識が朦朧とし、身の回りのこともできなくなった。（城間素子、湧川辰子の証言を要約）

## 3. 迫撃砲（黄燐弾）を「煙幕」に多用

『第10軍作戦計画アイスバーグ』「化学戦」（1945年1月1日付）において、米軍は4.2インチ迫撃砲弾（黄燐弾）と化学手榴弾<sup>\*2</sup>を通常兵器以外の化学戦用弾薬と位置づけていた。そして、「主に歩兵部隊に対して、高性能爆薬と黄燐による近接支援を行う」ことを目的に化学迫撃砲部隊を配備していた。黄燐砲弾などによって大量の白い煙を発生させ（煙幕）、日本軍の視界をさえぎり、米軍の歩兵部隊の作戦を隠し、日本軍の攻撃から防衛するために積極的に使用したのである。

その一方で、1945年5月17日付の付属文書6「化学兵器の使用」では、「a. 有毒ガスもしくは刺激性ガスは使用しないので、弾薬は目標地には運搬しない」と規定している。つまり、黄燐弾から発生する煙は有毒で刺激性があるにも関わらず、黄燐弾と「有毒ガスもしくは刺激性ガス」とを区別したのである。

つまり、米軍は焼夷や煙幕、燻り出す目的で使用する黄燐弾については、化学兵器として扱わないことにした。しかし、黄燐弾が壕で爆発すれば、閉ざされた空間に有毒なガスが発生し、黄燐の燃

焼によって酸素が奪われ、多数の死傷者を出したのである。第三外科壕からの生存者の証言はそれを裏付けている。



前線の偵察基地から砲撃を見る第96師団第382歩兵連隊第3大隊の兵士。大部分が黄燐砲弾である砲撃は歩兵部隊の援護のためである。1945年5月11日（沖縄県公文書館提供）

### おわりに

2010年10月29日、八重瀬町立具志頭小学校の新校舎建築現場で、4.2インチ迫撃砲弾（黄燐弾）から白煙が上がり、全児童が体育館に避難するという事件が起こった。

沖縄で発見される不発弾は、高温多湿な気候の中で、長い年月によりほとんどが酸化腐食している。腐食によって弾殻の破損した黄燐弾は破損箇所から黄燐が空気にふれ、自然発火のうえ爆発を起こすことがあり、非常に危険である。さらに、外形で黄燐弾を見分けることは難しい。<sup>\*3</sup>

米軍は黄燐弾を化学兵器ではなく通常兵器であるとして、現在も使用し続けている。しかし、沖縄戦で多くの命を奪い、さらに不発弾となった黄燐弾が、いつ爆発するかわからない状態で、今も地中に埋まっていることを忘れてはならない。

（学芸員 古賀徳子）

<sup>\*1</sup> 「ガス弾」が落とされた時期と場所について、嘉陽証言は島袋と津波古と多少異なるが、看護婦の意識障害など共通点が多いことから、同じ出来事であると見られる。

<sup>\*2</sup> 「M15 黄燐発煙手榴弾」「AN-M14 焼夷手榴弾」「AN-M8 高性能発煙手榴弾」「M-18 有色発煙手榴弾」

<sup>\*3</sup> 沖縄不発弾等対策協議会編『不発弾の知識』1980年

## 仲宗根政善日記抄(45)

[1980年] 二月十日

久しぶりに日が照った。当銘由金さんの奥さん静江さんの告別式が大典寺で、二時半から行われるというので、一時四十分ほど家を出た。近くのガソリンスタンドのところに、比嘉文さんが冬陽に照らされ立っていた。久しぶりだった。どこへですかと聞くと、お友達がなくなって、今日は一周忌に当り、そこへ行くとところだという。比嘉さんは、ひめゆり学徒隊の生き残りの一人である。終戦直後、金城和信氏にはじめて、第三外科を案内してくれたのは、比嘉さんだった。告別式へ行く途中、生き残りの生徒たちに逢うと、戦争中のことがまざまざと浮び、お互に生き残った生命をふかぶかと感じ、親しみがこみあげてくる。戦後は健康に恵まれて、すこやかに生きて来た。バスの中でも、戦争のことばかりが浮んで来る。途中、南風原愛子さんが、乗りこんでそばに坐って、当銘さんの告別式にいらっしゃるのですねという。数年前、鳳凰木の苗をもって行って、庭に植え、昨年、美しく咲いたとよるこんで電話してくれたことを思い出した。

宮城喜久さんとは、親友である。宮城さんは、平良松四郎教諭といっしょに自決した隊から、たった一人[注1]生き残った方である。息子がお嫁さんをもらって、今結婚式の準備で多忙を極めているとの話を、南風原さんはしておられる。文字通り、九死に一生をえた生き残りである。宮城さんには、いつも自決した十一名[注2]の顔がちらついているにちがいない。息子が結婚する、その喜びは他人とはことなる。ふかぶかとした生命感の中から湧いてくる喜びにちがいない。南風原さんと大典寺の前でバスをおりた。

いっぱい花輪でかざられた、当銘静江さんの霊前にぬかづきつつ、ひめゆりの塔に祭られた二百十一名のみ霊が、ともに、眼の前にあらわれているような気がした。かつて、与那嶺松助君の告別式に、生き残った生徒たちが、涙をはらはら流しながら、一人一人手を合わせていたときのことも浮ぶ。

当銘由金先生が、前に坐って、愛妻の霊前にうなだれているのは、いたいたしかった。

夕日がさして、静かである。十空襲の日、野田貞雄校長といっしょに、御真影を奉安した古墓が、今も木のしげみの中にひっそりしている。窓から見えている。

二月二十二日

西表島に、核燃再処理場の建設がすすめられつつあるとの情報がつたわっている。

西表島が最適地とされる理由は、一つには日本政府は、東南アジアへの核燃料を輸出する産業として考えており、西表が、日本の最南端にあるからだという。もう一つの理由は、核ハイジャック防止のためには、そばに基地のあることを必要とする。沖縄には米軍基地があり、自衛隊があるから、西表島は適地だというのである。

米軍基地があるために、沖縄は、核と結びつき、次第に平和とは逆の方向にひきずられ、危険な状態にのめりこみつつある。

沖縄海兵隊は、安保条約をふみこえて、有事の際は、ペルシャ湾に急きょ派遣すると、バーズ長官は明言している。アメリカ艦隊は印度洋に移動しつつあり、日本の防衛は、手うすになるから、日本は防衛力を強化せよと、米国はせまり、日本はそれに応ずる姿勢を見せている。

読谷飛行場では、住民の意志を無視して、落下傘降下訓練の演習を実施しつづけている。

沖縄の情勢は日一日と、住民の意志とは反対の方向におしやられつつある。反戦平和の意志を強化して行かなければ、再び悲劇の島となる。

お昼をすませて茶の間によこになると、わずかばかり咲き残った桜の枝から、新芽が吹き出るように萌え出ている。久しぶりに晴れた空には春の光がみなぎり、桜の若芽は、花よりも美しくかがやいている。幹には、一夫君が小鳥の籠をつつてあったが、夜へびがまといついていたので、とりは



らった。その幹はくろぐろとしているのに、何という美しい若芽なのか。桜の花や葉、枝のあたりに、生き残った生徒たちの笑いこぼれる笑顔がうつる。

断崖においつめられて、手榴弾をにぎりしめて、先生もういいですかと、射るような鋭い眼をむけた。胸につきさすように残っている。きずついて岩を枕にねた夜、阿旦の葉末に露が光っていた。ああして、死の淵からやっとながれて、三十余年もたち、ねころびながら、春の光にかがやく桜の若芽をじっとみつめる。全身がまるで光につつまれているようだ。生命のかがやきを感じる。青い空いっぱい生命がみなぎりあふれているような気がする。人間は毎日々々奇蹟的に生き残っているようなものだが、三十余年の生命をたもちつづけて、今この桜の生命にふれる。春光をあびた喜屋武、摩文仁の野や海岸の若夏のかげには、幾万の屍が埋もれている。生と死のへだたりをしみじみと感じさせられる。春の光と生命のかがやきを深く感じさせられる。

三月四日

石川清子の母親カマドさんがなくなられた新聞広告があった。

三女の石川清子は、気立てのやさしい生徒であった。南風原陸軍病院移動の直前に負傷して、五月二十五日の移動の夜は、担架にのせられて、学友がかついで、摩文仁までやっとなどりついた。渡嘉敷良子救出のことで、同壕をたずねたとき、山城芳と石川清子が毛布に身をくるんで、西平英夫教諭と病院長をかこんで話しているのをそばで聞いていた。二人はその話を聞きながら、かろうじて級友にかつがれて、摩文仁までのがれて来たことを、仕合わせだったと感じたにちがいがなかった。しかし、二人の眼にも力がなく、死の恐怖におびえつづけているようでもあった。

山城は、後に、第三外科にうつされて、六月十九日、ついにガス弾を投下されて、ひめゆりの塔で三

十四名〔注3〕の学友とともに最期をとげた。妹の信子さんも同壕にいたが、姉をはげまして壕脱出を考えていたようであった。信子は奇蹟的に生き残った。

石川清子は、本部壕から、伊原の第一外科壕に移された。山城姉妹と同じように、清子の妹いそ子が同じ壕にいた。この壕にも、六月十八日夜、看護隊の解散命令があった。私は壕の奥で解散命令を生徒達に伝達した。石川清子、神田幸子、知念芳等、重傷の生徒たちは、この命令を岩の上に寝ていて聞いたのである。

いそ子は、姉清子さんを壕に残して脱出するにはしのびなかった。姉の枕べでためらっているのを、早く出て行けとせきたてられて、やっとな出したという。最後のとき、清子さんはローソクの光で、静かに書物を読んでいたという。この話は、いそさんは、戦後誰にも語らなかった。

両親にとってはいっそうたえられないことであつたにちがいない。清子のすぐ上の姉の紀子さんからも、悲しみのお手紙をもらった。ご主人は、群馬豊橋市の教育長を長くつとめたことのあるすぐれた教育者である。親しく清子の母親にもお会いして、おわびも申し上げたかった。悲しみをかえってまさせることになるのではないかとためらっている中に、とうとう世を去られたのである。

戦争でなくなった生徒たちも、次第に世を去って行かれる。三月の空はいつも青く美しいのだが、ものうい。やがて三月二十四日、戦場へとたった日がやってくる。

※読みやすさに考慮して、字句を補った箇所がある。

また、明らかな誤字は改めた。

※〔 〕は編集で補った。

※〔注1〕生き残ったのは宮城喜久子と比嘉啓子の2名である。

※〔注2〕10名の誤り。

※〔注3〕37名の誤り。

# 資料館ガイド

## ◆資料館ご利用案内

- ①入館受付 午前9時～午後5時 閉館 午後5時25分  
②休館日 年中無休  
③入館料 大人¥300 高校生¥200 小・中学生¥100  
団体割引 20名以上 10%引き  
④交通 那覇から糸満市行きバス<sup>⑧</sup>で約30分、さらに糸満バスターミナルから<sup>⑧</sup><sup>⑩</sup><sup>⑪</sup>のバスで約15分、ひめゆりの塔前バス下車。

## ◆多目的ホールご利用の手引き

多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約30分）や証言ビデオ（25分）を視聴することができます。※ご予約が必要です。

【講話】 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00

【ビデオ】 9:10 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※毎週月曜日・年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 最大収容人員：200人（席）
- 資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。
- ホールは講話・ビデオ以外の目的（セレモニー等）には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせていただくこともございます。

## ◆VTR室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25分）
- ◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30分）
- ◇「ひめゆり学徒の戦後」（33分）
- ◇「戦火に消えた21の学園」（26分）

---

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第48号

2011（平成23）年11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館  
資料館 ☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原671-1 ☎ 098-997-2100  
財団事務局 ☎ 902-0067 沖縄県那覇市安里388-1 ☎ 098-884-1115  
URL <http://www.himeyuri.or.jp/>

---